Event Focus

第15回SKIPシティ国際Dシネマ映画祭

中山 秀一

今年で第15回を迎えた「SKIPシティ国際Dシネマ映画祭」は、7月13日（金）から22日（日）までの10日間、例年どおり埼玉県川口市の「SKIPシティ彩の国ビジュアルプラザ」で開催された。

この映画祭は、毎年7月の上旬に開催されるのだが、今年は早々に梅雨明けとなり、連日35度を超す猛暑の中で開催された。筆者は毎年この映画祭に連日通っているが、このような暑さは初体験であった。川口の駅から運行されるシャトルバスには、外国からの映画祭関係者も乗っているが、彼らは暑そうな表情を見せないのには驚かされる。

出番を前にヒプホップダンスの練習をする生徒たち

会場の広い中庭では、プロによるマジックショーや、市民による音楽演奏、女子生徒の若者ダンスなどが行われ、多くの住民たちが訪れて、映画祭の雰囲気を盛り上げていた。今回は、節目の第15回ということで、地元の川口市では、この会場で盆踊り大会を企画して、市民が共に楽しむ映画祭となった。

プロのストリートマジシャンと遊ぶこどもたち

☆オープニングセレモニー

初日にはオープニングセレモニーが行われ、映画祭の実行委員会会長上田清司埼玉県知事、同副会長奥ノ木信夫川口市長、総合プロデューサー八木信忠氏、ディレクター土川 勉氏の挨拶と報告があった。

今年のコンペティションには、過去最大となる98の国と地域から832作品の応募があった。これまでにノミネートされた作品の中には劇場公開されたり、海外の映画祭で受賞するなど高い評価を得ており、今やこの映画祭は「若手クリエイターの登竜門」ともなっている。

今年は開催15周年を迎える節目の年、初日に上映される恒例のオープニング作品は、川口市を広くPRするために、川口市が直接製作を担当し、同市を舞台とした映画を製作した。

タイトルは、一般公募で集まった50作品の企画から、本映画祭で過去2回ノミネートされている、中泉裕矢監督の新しい企画『君がまた走り出すとき』に決定した。

☆オープニング作品の上映

この映画祭では、新進監督を支援する観点から、当映画祭に縁のある監督を起用して作品を製作し、映画祭初日にオープニング作品として上映している。今年は上記したように、川口市が費用を出して製作した作品『君がまた走り出すとき』が上映された。

この映画は地元を舞台に、市内各所でロケーションしており、撮影には多くの市民が協力しているので、完成した映画を観るのは感慨深いに違いない。また、劇中最後のシーンになるマラソン大会では、ランナーや観客役で、市民から600人のエキストラを募集したという、これはまさに地域参加型の映画だ。

監督の中泉裕矢氏は、1979年生まれの茨城県出身で、初めて作った短編映画『円罪』が、2012年のSKIPシティ映画祭にノミネートされ、映画製作への自信につながったと語っている。

オープニング『君がまた走り出すとき』2018 ©川口市

この作品は、65歳を過ぎてから、世界6大マラソンを、日本人として初めて走破した古市武さん（市内在住）の生きざまに触発され、走ることを通して人生と向き合う人々を描いた群像ドラマである（公式カタログより）。

一人の若者（寛一郎）が、何者かに追われているように河川敷を走っている。息が切れてたどり着いたのは、住宅地にある和風の民家、木戸を開けて勝手に入り、庭の水道を拝借して飲んでいると、この家に一人で住む老婦人（松原智恵子）が親しげに「あらお帰りなさい」と家に招き入れる。

このおばあちゃんは、子どもたちが独立しているので、この一軒家に一人で暮らしている。実はこのちん入者のことを、すでに亡くなっている孫が帰ってきたと思っているのだ。すでに死んだ子供の思い出を、別の子に投影して愛情をそそぐ、というこ

国際コンペ部門審査委員長・渡辺真起子氏の講評

国内コンペ部門審査委員長・桝井省志氏の講評

とはあり得ることで、認知症とは言い切れない。事実今回の受賞作の 2 作品でそれが題材となっている。

事実上の居候となった若者は、一生けんめい庭の手入れなどを買って出て恩返しをしている。やがてそこに本物の孫娘かおり（山下リオ）が訪ねてきて、おばあちゃんから、孫の悟が帰ってきたと紹介されてショック。しかし若者の態度が大変真面目なので、何となく打ち解けてしまう。

近くのアパートに住む「熟年別居中」の男が、ラジオのトーク番組で、古市さんの世界マラソン走破の話を聞き、自分も仲間を集めて走ることを思いつく。

やがて、走るという楽しさが友好の輪となって、6 人のメンバーができあがり、「SIX TURTLES（6 匹のカメ）」というチームの名称も決まった。

しかし、この 6 人は、それぞれの訳あり人生を持っており、それをお互いに共有することで、さらに強い絆で結ばれているようだ。

実は、居候の悟がおばあちゃんの家に逃げ込んだのは、警察に追われていたからだ。オレオレ詐欺の受け子をやっていて、老婦人から 100 万円を渡されるが、良心が痛み、受け取らずに逃げてきたのだ。

いよいよ、最大の目標「川口マラソン大会」が迫るとき、悟はチームの皆に告白をして、大会が終わったところで自首することに決めたようだ。

大会当日、大勢の市民の応援のもと、奥ノ木信夫・川口市長の放つピストルの音でスタート、「6 匹のカメ」チームは良い成績でゴール。ゴールはこの SKIP シティ映画祭会場前の見慣れた広場だ。

裏口に待機するパトカーに向って、悟が歩き出す。その後ろ姿を温かく見送るカオリの顔には、特別の思いが感じられる。

☆ノミネート作品の規約変更

今年から、若手クリエイターが応募しやすいように、規約と部門構成が一部改訂された。

①長編部門は、長編映画の制作本数が 3 本（4 本）までの監督で、60 分（70 分）以上の作品であること。（カッコ内は改訂前）

②短編部門は、長編制作が未経験の監督による 15 分以上 60 分未満の作品であること。

③部門別けは、短篇部門のみであった国内コンペティションに長編部門を設け、アニメーション部門を廃して短編部門に統合した。

これにより、国内の長編作品は、国際コンペと国内コンペの双方を選んで応募することが出来る。事実今年は国際コンペに日本作品『彼女はひとり』1 本がノミネートされ、SKIP シティアワードを受賞した。

☆今年の審査委員長は

《国際コンペティション》（長編のみ）

渡辺真起子（日本）俳優：当映画祭 2012 年『チチを撮りに』に主演。

《国内コンペティション》（長編、短編）

桝井省志（日本）：株式会社アルタミラピクチャーズ代表取締役、プロデューサー

☆表彰式

猛暑の 7 日間にわたるコンペティション上映の審査を終えて、最終日の 22 日午前 11 時からクロージングセレモニーが始まり、審査の結果が発表された。

☆受賞作品

受賞作品は下記のように発表された。

【国際コンペティション（4 作品）】

①最優秀作品賞　『ナンシー』：2018 年 / アメリカ /86 分　監督：クリスティーナ・チョウ

②監督賞　『あの木が邪魔で』：2017 年 / アイスランド、デンマーク、ポーランド、ドイツ /89 分　監督：ハーフシュテイン・グンナル・シーグルズソン

③審査員特別賞　『最後の息子』：2017 年 / 韓国 /124 分　監督：シン・ドンソク

④スペシャル・メンション　『ザ・スワン』：2017 年 / アイスランド、ドイツ、エストニア /91 分　監督：アウサ・ベルガ・ヒョールレーフズドッテル

⑤ SKIP シティアワード（国内作品の長編を対象）**『彼女はひとり』**：2018 年 / 日本 /60 分　監督：中川奈月

【国内コンペティション（3 作品）】

①優秀作品賞（長編部門）『岬の兄妹』：2018 年 / 日本、監督：片山慎三

②優秀作品賞（短編部門）『予定は未定』：2018 年 / 日本、監督：磯部鉄平

③審査員特別賞（短編）『口と拳』：2017 年 / 日本、監督：溝口道勇

☆国際コンペ部門審査委員長・渡辺真起子氏の講評

全 10 作品は、どれも見応えがあり、とても丁寧に制作されたことを、作品そのものから感じることができました。あまりにも丁寧に深く語られているので、時に、心がいっぱいになり、感情的になってしまうような日もありましたが、審査は、わりとスムーズに進行したと思います。

☆ http://www.uni-w.com/fdi/　ではフルカラーでご覧いただけます。

『ナンシー』ミシェル・キャメロン プロデューサーが代理受賞

『あの木が邪魔で』監督が受賞の挨拶：これはアイスランドの話ですが、

ナンシーは、その似顔絵が自分に似ているので…

ご主人の提案で、民間の DNA の検査機関に依頼

実家の母親は、隣りのおやじが歳不相応の若妻と…

隣りの亭主は、ついにしびれを切らし、取り出したもの

制作された皆さま、俳優の皆さま、誠実に物語と向き合う姿を見せてくださいまして、ありがとうございました。最後になりますが、映画を楽しんでくださった観客のみなさまにもお礼を申し上げます。

☆国内コンペ部門審査委員長・桝井省志氏の講評

映画を作る人たちの裾野が広がり、皆さんが自由に映画をつくれる環境があるのは素晴らしい事だと思います。仕事、生活、映画作りという両方の作業で苦労されていると思います。その中で作品として、きちんとメッセージを発信している事に、敬意を表します。

今回、賞を逃した方も含め、ここに参加された方たちが、今後さらなる活躍をされることを、サポートしていきたいと思います。

☆国際コンペティションの受賞作品紹介

①『**ナンシー**』：**最優秀作品賞**：2018 年 / アメリカ / 監督：クリスティーナ・チョウ

ミシェル・キャメロン プロデューサーが代理受賞：まったく違う文化の中で、このストーリーが受け入れられ、感動を与えられたこと、これこそがまさに、映画の力だと思っています。日本大好きです！

この作品はアメリカの製作だが、内容はヨーロッパの雰囲気だ。パーキンソン病で気難しい母の介護をしながら、二人で暮らしている娘ナンシーが主役である。彼女は、ネットで善良な男を引っ掛けたり、嘘をついて人から関心を引こうという内向的な性格の持ち主だった。

母が睡眠中に脳梗塞で死亡して間もなく、30 年前に行方不明になった、当時 5 歳の娘の情報を求める TV 番組が放送された。そこには CG 合成によって描かれた、30 年後の成人娘の似顔絵が添えられていた。

ナンシーは、その似顔絵が自分に似ているので、録画した画像をコピーして、自分の顔と比べてみると瓜二つではないか。そこで、娘の情報を求めている家に電話すると、奥さんから大いに期待されて、車の道順などを詳しく教えてくれた。

そのお宅は、冬の北米のような森林地帯に建つ大邸宅で、そびえるような二階建ての屋根には、うっすらと雪化粧がされて美しい。

この邸宅の住人は、夫が心理学者で妻が文学者というインテリ夫婦。奥さんは訪ねてくるナンシーのために、食べきれないほどの料理を並べて待っている。

ナンシーが到着すると、奥さんはナンシーの顔に手を触れて期待感を示すが、ご亭主にはやや懐疑的なようすが伺える。

ナンシーは、5 歳の娘が当時使っていたままの部屋を寝室に提供してもらって、しばらく滞在することになった。その部屋には娘の愛用したグッズやぬいぐるみなどが沢山残されている。

ご主人の提案で、民間の DNA の検査機関に依頼し、3 人の唾液を採集して、2 ～ 3 日後の結果を待つことになった。

奥さんが検査機関からの電話を受けているが、結果はダメのようで、奥さんはがっくりと気を落とす。しかし奥さんは、すでにナンシーの姿に亡き娘のイメージを投影して愛情を感じており、ナンシーを無条件で、娘として受け入れようとしている。

夕食が終わったテーブルで、ナンシーは告白をしようと思ったのか、私はウソをついているので、それをお話したいと言いだす。しかし奥さんは聞きたくないようで、それは明日にしようと、ナンシーの話を制してしまう。

ナンシーは、寝室に行き眠りに就くが、気を取り直して、荷物をまとめ、そっと館を抜け出し、車で走り去る。明かりがついた 2 階の窓が開き、そのようすを夫婦は見守っているようだが、どのような気持ちで見送ったのだろうか。

今は亡き子供や孫に代わる者が現れると、その人に生前の愛する肉親を投影して愛情を注いでしまう、という題材が、偶然か 3 作品にみられた。

『ナンシー』（最優秀作品賞）、『最後の息子』（審査員特別賞）、『君がまた走り出すとき』（オープニング作品）の３作品だ。

②**『あの木が邪魔で』：監督賞**：2017年/アイスランド、デンマーク、ポーランド、ドイツ　監督：ハーフシュテイン・グンナル・シーグルズソン

監督が受賞の挨拶：これはアイスランドの話ですが、どこでも起こり得る普遍的な話。戦争だってそうだと思うのです。これは僕の反戦映画です。

この作品は、アイスランド郊外の、テラスハウスと呼ばれる、庭付き４軒続きの２階建て集合住宅での話。日本ではあまり見られない形式だが、庭が隣りと続いているので、生け垣などで仕切ってある。

この集合住宅の、隣り合った２軒の家庭がこの映画の主な舞台だ。お隣どうしで生じた根深い憎しみが、少し変わった手法で描かれる。

ある幼稚園児の一人娘を持つ夫婦が、愛のない冷めた雰囲気で眠りに就く。頃合いで夫が寝室を抜け出し、ポルノ映像をパソコンで見ている。気配を感じた妻が覗きに来ると、慌ててノートPCを閉じたのだが、大型のモニターには、男女が絡むセックス映像が見えているではないか。

妻はそれを覗き込んで、ショックを受ける。何とその相手は、妻も知る女性で、夫はその女性とのセックスシーンを撮影して、その映像を時おり見ていたのだ。この夫は半袖でも見えるほどの刺青をしているが、職業などは不明だ。

浮気男と罵倒された夫は、直ちに着の身着のまま追い出されてしまい、実家に戻って泊めてもらうことになる。ところが、この実家というのが、前述した。仲の悪い家庭の片方で、この庭にある木のために、隣りの庭が日陰になると、文句を言われているのだ。

実家の母親は見るからにがんこ者で、うちの木は絶対に触らせないと突っ張っているが、お互いの嫌がらせが、次々とエスカレートしてゆく。

隣りの家はどうかといえば、実家のおやじと同じような年齢なのに、娘のような若い嫁をもらって嬉しそうだ。しかし子どもがうまく出来ないのか、若妻に人工受精を受けさせている。

実家の母親は、隣りのおやじが歳不相応の若妻と暮らしていることが気に入らない。実家ではシャムネコを飼っており、隣りはシェパード犬を飼っている。

実家の家では、このシャムネコが行方不明になり、車のタイヤが４輪ともパンクさせられた。

一方お隣では、シェパードが居なくなり、大騒ぎとなったが、数日後に、玄関先に立っているのを、帰宅した夫婦が見て駆け寄り、愛犬に触れると、それは何と動かない剥製の姿だった。

隣りの亭主は、ついにしびれを切らし、夜中に問題の木をチェンソーで切り倒してしまう。ところが庭にテントを張って寝ていた息子の上に、倒れた木の幹が直撃して息子は死亡。

ついに両家のおやじたちは、隣家の工作室で、もみあいの大喧嘩になり、工具でもって殴り合い、２人とも死んでしまう。

やがて行方不明のシャムネコが、突然帰ってきて、生き残ったのは、母親と隣りの若妻とシャムネコだけ、という結末になる。

この映画の面白い点は、浮気で追い出された夫が、何とかよりを戻そうと動き回り、幼稚園から娘を連れ出して警察沙汰になるなど、結局、娘の親権も取り戻すことが出来ない。このストーリーが、実家とお隣のいざこざと並行して進行するという構成になっているのが新鮮だ。

③**『最後の息子』：審査員特別賞**：2017年/韓国/124分、監督：シン・ドンソク

表彰式に届いたシン・ドンソク監督のビデオメッセージ。「今回の受賞、また、日本の観客の皆様に私たちの作品をご覧いただけましたたこと、大変光栄です。あらためての感謝と、次回のSKIPシティの映画祭にぜひ参加をしたいと思います。ありがとうございます」

この韓国作品は、今回の国際コンペティション部門で、私が最も気に入った作品である。シン・ドンソク監督は1978年生まれ、数本の短編映画が知名の映画祭でグランプリを受賞しており、本作品が長編のデビュー作である。

表彰式に届いたシン・ドンソク監督のビデオメッセージ

母親役を演ずる女優の演技が、抜群だ　ⓒ an ATO production

「人殺し！」などとキョンヒを憎んでいた母親だが、次第に情が移る　ⓒ an ATO production

私が気に入っている理由は、新人にも関わらず、その演出は極めてオーソドックス、正攻法で、今の若い監督にありがちな、奇をてらった演出は全く見られないことだ。この監督は、ストーリーを展開する上での伏線を几帳面に施しているので、「ああやっぱりそうだったのだ」という、なっとく感を視聴者に与える。

また、母親役を演ずる女優の演技が、抜群である。

ある夫婦の息子（高校生）が、川遊びで友人が溺れるのを助けようとして、自分が溺死してしまうが、相手の友人キョンヒは助かる。

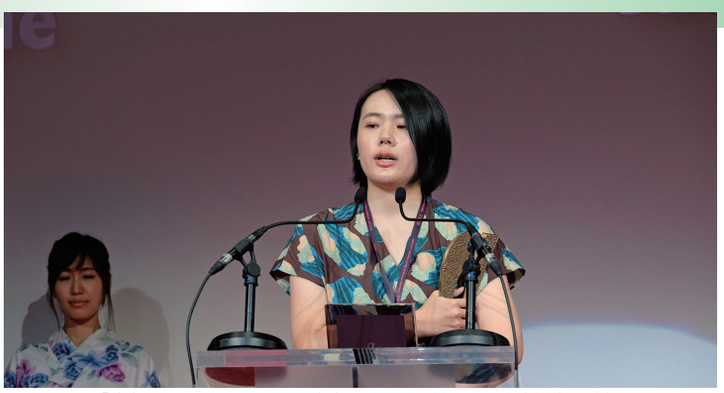
失意の底にある両親だが、美談の息子の親ということで、行政から「義死者賞」を授かり、支援金が交付され、寄付も集まり、脚光を浴びる存在となる。

母親は、主婦仲間から「いくら貰えるの？」などと、羨望とやっかみの言葉を浴びせられる。

父親の職業は、新築や改装家屋などの壁紙を貼る、内装業の社長だが、大手から下

☆http://www.uni-w.com/fdi/　ではフルカラーでご覧いただけます。

『ザ・スワン』ビルギッタ・ビヨルズドッテル プロデューサーが代理受賞


『彼女はひとり』トロフィーが重くて…すごく嬉しいです中川奈月監督

その理由は、少女の性格が子供らしくなく、文学好きで

長距離バスに乗って到着した、目指す田舎の自然は

幼なじみを執拗に責め立てる女子高生　ⓒ 彼女はひとり

幼なじみを執拗に責め立てる女子高生　ⓒ 彼女はひとり

請けする零細業だ。

やがて、助けられた生徒キョンヒが、両親の離婚などのため、一人で自活しているのを知り、父親は、この子を自分の会社に雇ってやる。

雇ったキョンヒは、仕事をすぐに覚えたり、覚えなかったり、線が細く、何かを心に抱えているような少年として描かれている。しかし、親方の指導と自己努力で、壁紙貼りの国家資格を取得した。

当然、「人殺し！」などとキョンヒを憎んでいた母親は、彼を雇ってやる、などということは大反対だ。

その結果父親（夫）との夫婦仲が冷え込み、新たに子供を産みたいと考えるが、夫と寝るのはいやだ。

そこで、夫から精子だけを提供させ、人工授精で子供を産もうとする。しかしこれが失敗して流産となり入院して落ち込む。

キョンヒは、彼女が入院している病院に見舞に行き、見舞品を看護婦に託そうとするが、看護婦から直接病室に入って届けるよう指示される。

キョンヒは、期せずして自分を嫌っている母親と、病室で間近に対面することになった。落ち込んでいる母親は、見舞に来てくれた、優しそうなキョンヒと話をしているうちに、キョンヒを死んだ息子に置き換えるような母性愛が芽生える。

この病室での、母親の揺れ動く気持ちの心理描写が、実に見事で、母親役の女優の演技と言い、演出と言い、この映画の見どころだと思う。

ところが、ここまでは、「許し」の美談で済むのだが、ここで大問題が起きる。キョンヒが母親に告白したのだ。それは、助けようとして溺死したとされる息子は、実は仲間たちから、リンチを受け、鉄棒で殴られて川に沈められたのだという。

つまり、キョンヒは助けられたという恩を、心に感じながら過ごす役を、いみじくも演じていたわけだ。両親にとってはまさに青天の霹靂、息子は人助けで死んだのではなく殺されたのだ。

当然警察が生徒の事情聴取に動いたが、加害者たちは不起訴になるありさま。納得できない父親は告訴の準備を始めるが、高校の評判が悪くなるので、思いとどまるように校長からの要請が届く。

一方キョンヒは、事件のあった河に通じる林をさ迷い歩き、ポケットに河原の石を詰め込み、河の中に入って行き入水自殺を

受賞者と主催者が記念撮影

はかる。

キョンヒの安否を気遣う両親は、同じく事件のあった河に行き、水中でもがいているキョンヒを助け出す。河原に上がった３人は、疲れ果てて仰向けに大の字に横たわり、天を仰いでいるロングショットで終わる。

④『ザ・スワン』：スペシャル・メンション：2017 年 / アイスランド、ドイツ、エストニア /91 分　監督：アウサ・ベルガ・ヒョールレーフズドッテル　ビルギッタ・ビヨルズドッテル プロデューサーが代理で受賞：

主演の少女ソウル役のグリーマは、役では９歳だが撮影時は 11 歳、とても賢い子で、彼女と話していると、まるで 40 才の人と話している気になる。

この作品もアイスランド、ドイツ、エストニアの製作で、監督は 1984 年アイスランドの首都レイキャビック出身の女性。アイスランド大学とソルボンヌ大学で比較文学を学ぶ。その後ニューヨークに移住、2012 年コロンビア大学で、映画の修士号を取得している。

この映画は、アイスランドの有名な作家の同名小説を原作としているということだ。この女性監督は、映像の詩人と呼ばれる知名なソ連の映画作家、アンドレイ・タルコフスキーの作風に傾倒しているように思える。事実、映画の中で、季節アルバイトの文学青年に、「必要なのは外界ではなく鏡だ」「タルコフスキーの映画から引用した」というセリフを言わせている。そして、タルコフスキーの『鏡』のように、韻を踏んだ詩のようなナレーションが心地よい。このナレーションは、主演の少女ソウルが語っており、彼女自身が舞台回しの役も演じている。

さて、このタルコフスキー風の映画では、ある家庭の９歳の少女ソウルが、田舎に住む親せきの所に夏の間行かされることになった。

その理由は、少女の性格が子供らしくなく、文学好きで感じやすく、無口で物思いにふけったりする。同じ子供仲間からは、変わった子だなと相手にされない。そこで、少女に田舎暮らしをさせて、大自然を体験させてやりたいという親の思いだ。そして、滞在先の手伝いをして、いくらかでも役にたてば、少女自身の成長になるだろう。

長距離バスに乗って到着した、めざす田舎の自然は、いかにもアイスランドらしい、日差しが少ない荒涼とした丘陵地に、牧草が点々と生えているという、美しくもさびしげな風景だ。

バス停に出迎えた牧場のあるじに案内された家屋は、広い丘に建つ大きな酪農家の家だ。ソウルは、独立して今はいない娘の部屋を与えられ、そこに寝起きすることになった。明日から、少女ソウルにとって、色々な体験が始まり、多くを学ぶことになる。

最初の体験は牛のお産だ。産道から顔を出した子牛の頭を、少女も手伝って、皆で引っ張り出すと、小牛はドスンと床に落ちる、やがて子牛の立ち上がる可愛さに少女は目を見張る。

ある日突然この家の娘が離婚して帰ってきたが、妊娠していて、誰の子か分らないという。母親が車で医者に連れて行き、堕胎をさせる。歓迎されない子供を下ろすのだよと、娘は少女に言って聞かせる。

ある日、夏の季節アルバイト称する青年が、少女の部屋に同居することになる。この青年も無口で、毎日克明に日記をつけて、詩なども書いている文学青年だ。その日記も「詩」のような韻を踏んだ文面で、読み上げると耳に心地よく響く。

お産を手伝った仔牛を、屠殺して食べることになった。アルバイト青年が、必死に抵抗する仔牛の頭を抑えて、打撃銃を撃ち、血液を抜いて解体する。お産を手伝ったこの仔牛に、愛情を注いでいた少女には、目を覆って直視することは出来ない出来事だった。この仔牛の肉は、オーブン焼きにして、その日の夕食に供されて皆で黙々と頂く。

文学青年は、少女の口に軽くキスをして、「成人して愛のない結婚に息苦しさを感じて、それを忘れたかったら思い出してくれ、タバコ臭かったキスを」と少女に告げる。

乗馬に挑戦、夏開催の、年に一度の家畜の品評会は、ブラスバンドの演奏や、ダンスを楽しむイベントだ。しかし何となく、わびしさが漂うのはどういうわけだろうか。人口が少なく年寄りが多いせいか。

その帰り道、青年は馬に乗って川に転落して行方不明になる。この川に住む白鳥は妖怪の化身だという言い伝えを少女は聞いている。やがて大きな白鳥が舞い降りて少女の前に現われ、何か物言いたげに少女を見ている。あの文学青年の化身だろうか。

この作品は、寒々としたアイスランドの大自然を背景に、海と川と湖と人の営みを、美しいカメラアングルで、抒情豊かな映像詩として描いている。女性監督らしい繊細さを感じさせるアート系の作品だ。

⑤『彼女はひとり』：SKIP シティアワード：2018 年 / 日本 /60 分　監督：中川奈月

トロフィーが重くて…すごく嬉しいです。まず、この映画祭に見つけていただき、ノミネートしていただいたこと、そして上映する機会をいただけたことが嬉しいですし、さらにこのような賞をいただけて本当に光栄です。たくさんの人たちの力によって助けていただいて、なんとか作品になったものなので、賞をいただいて、皆に報告できることを本当に嬉しく思います。

彼女が抱える心の闇とは？ある出来事が原因で自殺未遂を経験した女子高生・澄子は、日々無気力に生きるようになっていた。死の淵から戻った彼女は、学校の女性教師と交際をしている幼なじみの秀明を脅迫するようになるが…。（公式カタログより）

☆あとがき

今回の国際コンペ部門は、北欧系など、社会が成熟した国の作品が多く、セックスシーンも多かった。

反面、途上国のスラム街を舞台に展開する心温まるドラマとか、そのような作品は見当たらなかった。そしてアイスランドのノミネート作品２本が、双方とも受賞したのは奇遇だが、むしろ当然かもしれない。その両作品のタイプが正反対なのが面白い。

Syuichi Nakayama
日本映画テレビ技術協会名誉会員

☆ http://www.uni-w.com/fdi/　ではフルカラーでご覧いただけます。